～心豊かで活力あるまちづくり～

2011年12月1日発行

清里 まちづくり No.23

企画・編集・発行 清里まちづくり協議会 事務広報部会

清里まちづくり協議会事務局
〒370-3573 前橋市青梨子町339 清里公民館内
TEL251-9005 FAX255-0341

http://www.city.maebashi.gunma.jp/ まえりあ清里 ▼ で検索

第33回清里地区文化祭開催及びその他の話題

十月二十九日（土）に開催された清里地区文化祭での各部会の活動及びその他の話題を紹介します。

花いっぱい運動部会

花いっぱい運動部会では、文化祭の来場者に「花苗プレゼント」を実施しました。

当日用意した苗は、花はなクラブの人達が、大切に育てている花のこぼれ種から成長した苗を鉢上げしたものです。いろいろな種類の苗が二〇〇鉢以上も集まりました。この花の苗で、清里の「花いっぱい運動」の輪が大きく広がっていけばと願っています。

（櫻井恭子）

文化祭での「花苗プレゼント」

そば打ち部会

『文化祭に参加して！』

十月二十九日(土)晴天、朝七時より会場づくりに催物部門や模擬店などの各テントを張って始まる。そば打ち部会も会場ができ、スタッフ全員集合。

午前九時、打ち手四名は打ち始め、他のスタッフは準備を始める。午前中に多く打って十分間に合うよう、四人は二時間しっかりと打ったが、十一時頃より、おみやげ用のそばを求めるお客さんが並び、アッという間に「そば」が足りない！ 打ち手四人は真剣に取り組む。しかし、食べるお客さんもどんどん増える。ありがたいことだが、打ち手は昼食も食べずに打っていた時、スタッフより、「おにぎりを食べて」の声がかかり、にぎり飯を頬張りながら、そば打ちに専念する。一方、スタッフもゆでたり、運んだり、皆んなフル回転で働いている。夕方五時頃より、またまたおみやげを求めるお客さんが多くなる。しかし、材料も少なくなる。注文を受けた分をチェックしてみよう。あたりも少し暗くなるので、もう片付けて終わりにしよう！

完売の盛況でした。お出でいただいたお客さん、本当にありがとうございました。来年もよろしくお願いいたします。また、お手伝いいただいたスタッフの皆さん、本当にご苦労さまでした。

（松岡好一）

文化祭でそば打ちに専念するスタッフ

『そば刈りをして』

十一月十五日（火）午前七時より、前原の松下さんの畑で、自治会役員の方やそば打ち部会の人たちなど大勢の方が参加して、そばの刈り取りと、天日干しのハンデ（干し台）にかける作業をした。天気に恵まれ二時間程で終了。来る二十七日（日）に脱穀して「新そば」ができる。どんなそばができるか楽しみです。

（松岡好一）

そばの刈り取り作業

まちづくりだんべえ部会

今年は、青梨子町納涼祭から始まり、前橋まつり、清里地区文化祭等、子ども達と一緒に楽しく踊らせていただき、充実した活動をしています。

文化祭でのよさこいソーラン

新たに八名の仲間も加わりましたので、これを機に振り付けを変え、皆で踊れる親近感のあるだんべえを目指したいと思います。

（松嶋朋子）

食育部会

『文化祭への参加をして』

食育部会では、清里地区文化祭への参加をいたしました。今回の「きよさと焼き」は、４００枚以上を販売することが出来ました。チーズ焼きを販売したのですが、子供たちには大変人気がありました。

今回も、前日の準備作業に始まり、当日の朝から夜まで多くの人達に助けていただきながら、大成功を収めることが出来ました。本当にありがとうございました。

私たち食育部会では、きよさと焼きを作るにあたり、毎回少しずつ進化をさせています。今回のきよさと焼きには、手作りしょうがを使い、より安全に安心して食べられるきよさと焼きにしました。味や食感などにもこだわりながら、皆さんに親しまれる、おいしいきよさと焼きを、これからも作っていくために日々努力をしていきたいと思っています。

最後に、食育部会では、お手伝いをしてくれる人を募集しています。作り方を覚えたい、焼いてみたいと思った方は、年齢・性別問わず歓迎いたしますので、清里公民館に訪ねて来てください。

（新井博孝）

文化祭でのきよさと焼きテント

『きよさと焼き教室を終えて』

毎年、小学三年生の授業の中で、大豆を育てたりする勉強の一環で、地元の大豆（枝豆）がどのように食べられているか調べています。その中で『きよさと焼き』を作って食べようということになり、食育部会がお手伝いをしています。

十一月十七日の午後、三年生二十六名が清里公民館の調理実習室に集まり、三名のお母さんに手伝ってもらい実習が始まりました。きよさと焼きを食べるのは今回が初めてという子どもが大勢いたのはちょっとショックでしたが、皆楽しみにしていたらしく、目をキラキラさせていました。

六年生の実習ではフライパンを使いますが、今回はホットプレートで、自分が食べる分を自分で焼いてひっくり返すという作業をしてもらいました。上手に焼けた子や心配そうに眺めている子など、自分で作る楽しさや難しさを経験できたと思います。

最後は時間がなく、直接、感想を聞けなかったのが残念でしたが、みんな嬉しそうに帰っていったのでほっとしました。これからもきよさと焼き教室は続けて行きたいと思います。

（新井博孝）

きよさと焼き教室の様子(清里小３年生)

各町の話題あれこれ

■池端町■

『秋の収穫祭』

池端公民館で十一月十九日（土）に何十年と続く伝統行事である収穫祭（十日夜）を催しました。豊作に感謝し、来年もまたよき年となるよう祝う行事で、新米で餅をつき、子ども会・清寿会・町民大勢で協力します。子ども達には、清寿会の皆様が藁鉄砲とその意味を教えて、子ども達は自前の紙芝居や綿アメを作り、地区の皆さんの相互の親睦と交流がおおいに図られました。

（蜂巣昇三）

藁鉄砲を作る池端町清寿会の皆さん

池端町 秋の収穫祭の様子

■上青梨子町■

『秋祭り』

上青梨子町の秋祭り（樽みこし、百万遍）が九月二十五日、好天のもと二百名あまりの参加者によって、盛大に行われました。

祭が開会し、式典の後、子どもたちによる町内みこしの巡行が行われ、その後、清寿会の音頭で子どもたちも参加して、無病息災を祈りながら大きな数珠玉を廻して、南無阿弥陀仏南無阿弥陀と念仏を唱えました。

そしてゲームをしながら食事もし、楽しい一日を過ごしました。

（馬場隆雄）

上青梨子町 秋祭りの樽みこし

■青梨子町■

『十日夜祭』

十一月五日（旧暦十月十日）、青梨子町集会所に自治会役員、清寿会の皆さん、子ども会が集まり、十日夜祭が行われました。青梨子町のこの祭は、昭和五十五年の集会所新築時に、昔の行事を復活させ始まったと聞いています。ワラ鉄砲で地面を叩き、モグラを追い払う行事で、豊作を祈願するお祭です。

清寿会の男性と子ども達が一緒にワラ鉄砲を作り地面を叩いたり、餅つきを体験したり、かまどで木切れを燃やしたりして楽しみました。台所では子ども会のお母さんに混じって、けんちん汁の材料を切る料理好きの子もいました。

お年寄りから子どもまで、お餅つきをし、清寿会の女性約二十名の方々が、アンコロ餅を沢山作りました。その後、子どもたちは清寿会々長から、昔から伝えられているこの祭の話を聞き、役員達が作ったおでん、けんちん汁、それにお餅を食べ、満足そうに帰っていきました。子ども達が帰った後、清寿会の皆さんと自治会役員で労をねぎらい、昔話等をにぎやかに語り合い、お祝いをしました。

（田村文男）

青梨子町 十日夜祭での餅つき

『さつまいも収穫祭』

十月十日、さつまいもの収穫を、自治会、清寿会、子ども会の総勢五十名で行いました。当初、九月下旬に予定しましたが、清寿会役員の方から、昨

年は畑の周囲のいもは大きいが、畑中央のいもは細かったと聞き、試し掘りをしたところ、やはりまだ大きくなっていませんでした。そこで、二週間程先に延ばし、十月十日に掘ることにしました。

その結果、大収穫となり、子ども達は、いもが大きく長いのでなかなか掘れず、大人の人に手伝ってもらい、やっと収穫していました。参加者全員に袋いっぱいのさつまいもを分配した他、いつも自治会に協力をいただいている方々にも配りました。それでもまだ沢山残っていました。

かまどで火を燃やし、大きな釜で朝一番に収穫したいもを蒸かして、お茶の時に食べました。大変好評でした。

（田村文男）

青梨子町「さつまいも収穫祭」

■青梨子町前原■

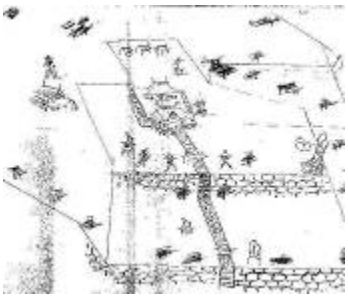
『歴史を知って、築こう［前原］』

十一月十九日（土）、前原集落センターで、生涯学習まちづくり「講演会」が標記の演題で、開催されました。地元前原在住で、郷土史研究家の松下熙雄先生を講師に迎え、講演いただきました。

当日は、雨で出足が心配されたのですが、四十名近くの方の出席をいただき、実りある講演会となりました。

前原の氏神神社である「熊野神社」に係る古文書に始まった講演は、境内の石宮に印されている「前原村」、更に上州座繰り器の創始者・高橋邦七、養蚕指導者・井草太郎右衛門や松下政右衛門など数多くの養蚕の偉人が、この前原から輩出されている事など、文献に基づく説明と、○○さんち（屋号）の石碑には…というように、参加者に問い掛けられながら進められた講演は、予定時間を大幅に超える意義あるものでした。

（粟岡　茂）



熊野神社

前原の歴史を講演する松下熙雄先生

連載　清里の歴史

『江戸時代の池端村（2）』

安政二年（１８５５）の渋川村組合村々地頭寄場御書上帳（堀口家文書）によれば、清水領分５９石３斗余（源次郎組）、家数８、男２１・女１７、馬２疋、旗本大久保筑前守知行所（要右衛門組）６５石３斗余、家数７、男２２・女１９、馬３疋、内藤内蔵知行所（幸之助組）石高同前、家数１４、男２９・女１９、馬２疋、大久保近江守知行所（重兵衛組）石高同前、家数７、男１９・女２１、馬３疋、大久保槍次郎知行所（伊右衛門組）石高同前、家数９、男２４・女１８、馬１疋、杉山宗三郎知行所（勘右衛門組）石高１９石６斗余、家数５、男１６・女１９、馬１疋とあり、これをまとめると石高３５０石６斗余、家数４８軒、男１３１・女１０３、馬１２疋であった。他に余地高五反、真言宗天明寺、１反８畝、鎮守太神宮とある。

「農間之稼男桑薪刈又者祢古筵等織女者絹木綿布仕候　当所産物者蚕少々仕候　江戸出しいたし候品々無御座候」とある。

池端村には、慶応四年の「村明細書上ヶ帳」（小曽根家文書）が残されているが前号で紹介した内容とほぼ同様である。村の家数は５０軒、総人数 男９９・女９６人、合計１９５人、馬３疋となっている。明治十年（１８７７）ごろの家数は６２、人数２８８、馬９疋、物産として養蚕・手挽糸、絹太織とあり、品質は中等、産出数は僅かで、民業は「男農耕采薪索絹ヲ治ムル者５０戸、女養蚕製糸織物ヲ業トスル者１４６名」とある（郡村誌による）。また、池端村には、天保七年（１８３６）から九年にかけての天保飢饉の実態を詳しく記録した「凶年飢饉覚書」という貴重な小曽根家文書が残されている。この史料からは当時の天候、作柄、穀相場、職人の手間代、食べ物などが記載され当時を知る大切な史料となっている。内容については、後日紹介することにする。

明治元年（１８６８）には岩鼻県に属し、同四年群馬県、同六年熊谷県の管理下にあったが、明治九年から再び群馬県となりその統治下になった。

（松下熙雄）